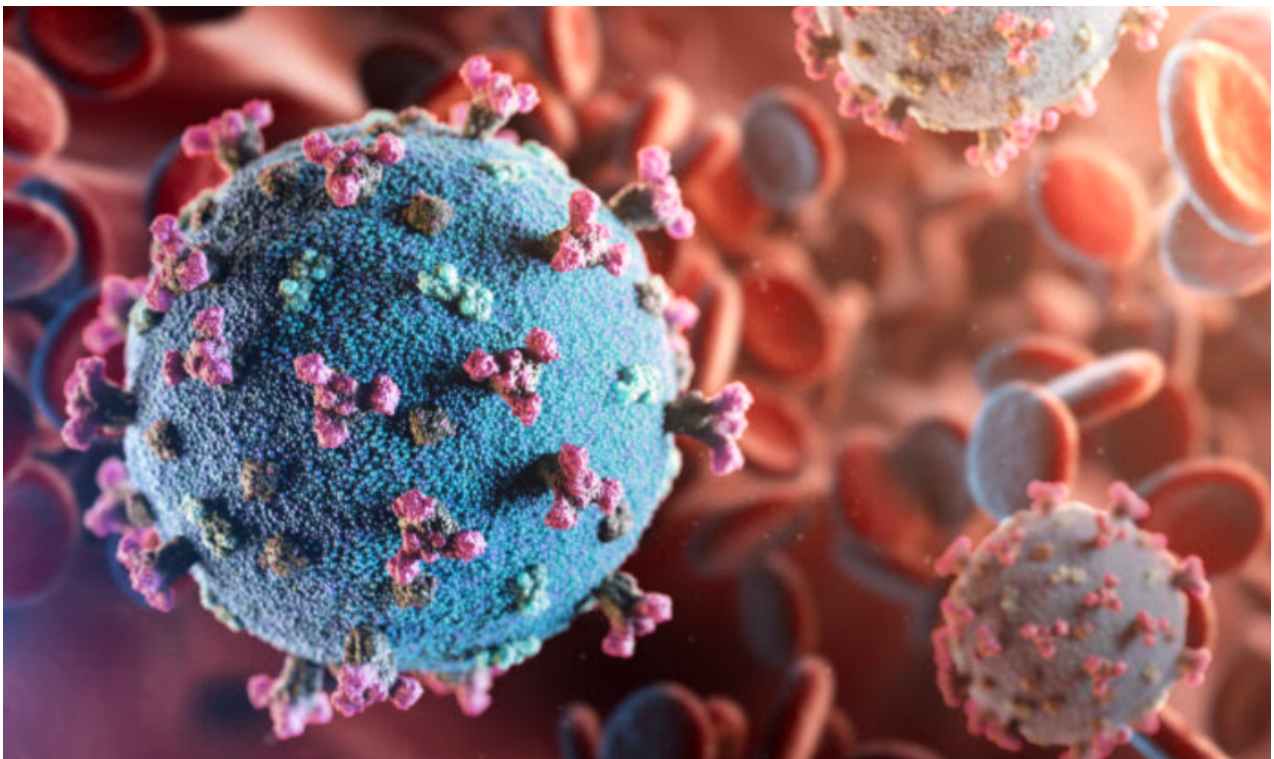


ウイルスの存在と病原性の科学的証明手 法に関わる公開討論会の提案書

**(新型コロナウイルス感染症パンデミックに不可欠なウイルスと
その病原性が存在していない可能性を検証する。)**



提案先：京都大学, 医生物学研究所、河本宏所長、ウイルス共進化分野 宮沢孝幸准教授様へ

提案者：矢の会・並盛研究室 代表 濱田慎太郎

電話：080-7823-7882

E-mail：n.kenkyuu@outlook.com

2023年9月28日 改訂2023年11月2日

※お手数ですが、返信はメールにてお願いいたします。

ウイルスの存在と病原性の科学的証明手法に関わる公開討論会の提案書

(新型コロナウイルスパンデミックに不可欠なウイルスとその病原性が存在していない可能性を検証する。)

背景

2022年9月11日現在、クリスティン・マッシーがコーディネートした情報公開（FOI）請求による広範な調査の結果、35カ国以上にある209の主な保健・科学機関のうち、SARS-CoV-2ウイルスとされるものの直接的な証拠を提出できたものは1つもなかったことが報告されています。日本においても、市民による公衆衛生、国立感染症研究所、厚生労働省へのSARS-CoV-2ウイルスの分離と同定に関わる行政文書公開請求に対しても、国立感染症研究所でさえも証拠となる文書を提出できませんでした。世界各国政府に対する情報公開請求によって明らかになったように、ウイルス学は、この欠落した証拠について言い訳をしてきましたが、この恥ずべき欠陥を差し引いても、その様々な方法論が市民や分野外の科学者によって精査されるにつれて、ウイルスの存在証明とウイルス学の欺瞞が隠れる場所がなくなりつつあります。ウイルスの存在を否定する著名なトーマス・コーワン医師・博士は「病原性ウイルス説が問題であることの第一の証拠は、病気の人間や動物の組織や体液から、ウイルスの定義を満たす粒子が直接単離され、精製されたことを示す科学論文が発表されていないことであろう。一般に受け入れられている“分離”の定義（あるものを他のすべてのものから分離すること）を用いれば、ウイルス学の歴史においてこのようなことが行われたことはないというのが一般的な見解である」と述べています。

トーマス・コーワン他、「『ウイルス論争を決着させる』声明」、2022年7月14日 <https://drsambailey.com/resources/settling-the-virus-debate/>

世界保健機関（WHO）は、「2003年、SARS-CoV-1に関して、「原因（病原体）の決定的な同定は、いわゆる『コッホの仮説』におけるすべての基準を満たさなければならない。これらの基準を満たすために必要な追加実験は、現在オランダの研究所で進行中である。」と説明していましたが、WHOのこの声明文は2021年に説明なしにウェブサイトから削除されました。しかしながら、現在もインターネット・アーカイブを通じてまだ確認することができます。

2011年11月24日、元ウイルス学者ステファン・ランカ博士は、自身のウェブサイトで、麻疹ウイルスの存在を証明できた人に10万ユーロの賞金を提供すると発表しました。その発表文は次のようなものです。「麻疹ウイルスの存在を主張するだけでなく、証明し、特に麻疹ウイルスの直径を決定した科学論文を発表した場合、報奨金が支払います。」。2012年1月、デビッド・バーデズ博士がランカ博士に6つの論文をしめし、10万ユーロを自分の銀行口座に振り込むようランカ博士に請求しましたが、ランカ博士は証明していないとして拒否しました。2017年1月16日、ドイツ連邦裁判所（BGH、ドイツの最高裁判所）の第一民事上院は、麻疹ウイルスの存在に対する証拠を提出できなかったため、基準を満たさないと判断し、ステファン・ランカ博士の勝訴が確定しました。ロストック大学病院医療微生物学・ウイルス学・衛生学部長アンドレアス・ポッドビエルスキー氏は、ウイルスに関わる論文のどの著者も国際的に定められた規則と優れた科学実験の原則に従って対照実験を行っていないと述べています。最高裁は、麻疹「ウイルス」の存在と分離を主張する基礎論文である、1954年にジョン・フランクリン・エンダースが発表した論文が、「ウイルス」の存在を証明する価値がないと判断したことを意味しています。エンダース論文以降のほぼすべてのウイルス分離同定に関わる論文及びウイルス学自体が、エンダースが開発した細胞培養法にその根拠を置いているため、ウイルス学がこれまで提示してきた根拠が無効であると判断されたことになります。HIV、SARS、MERS、HPVなど全てのウイルスの分離、同定がエンダース論文に準拠しているため、ウイルスの存在自体が確認されておらず、ウイルス学そのものが科学的手法に基づいていない学問であることが白日のもとに晒されたのでした。

ウイルスそのものが分離同定されていないならば、SARS-COVID-19パンデミックと感染蔓延防止対策として強制されたマスク、ソーシャルディスタンス、ワクチン接種などの科学的根拠が消滅したことになります。インターネットが普及し、ネットにつながる人が全て情報を収集、調査、研究でき、その結果を発信できる現在、感染蔓延防止対策として市民に強制されたことに疑問を持った多くの市民が自ら情報を探索し、ランカ博士の裁判、トーマス・コーワン医師、アンドリュー・カウフマン医師、マーク・サマンサ・ベイリー医師夫妻、ロバート・ヤング博士などの文献に触れて、マスク着用、ワクチンの無効性を理解し、ウイルスの存在、ウイルス学自体への疑義が数限りなく発信されたことで、世界の多くの市民が科学としての感染症学、ウイルス学のみならず、ウイルス学者に対しても確信に近い疑問を持つようになりました。

目覚めた市民、他分野の科学者とウイルス学の権威との公開討論会提案

上記の背景の中、医師、科学者、市民によるウイルスの存在及びウイルス学自体への数々の追求に対して、ウイルス学者はこれまでのエンダースに準拠する論文だけを主張し、指摘に対する科学的な議論を避けてきました。多くの公的資金、即ち、市民の税金を研究費として使用している権威といわれる機関、研究所や研究者は、その研究費のもとである税金を収めている市民の科学的な疑問に対して公開の場で答えなくては、市民のウイルス学、研究機関への信頼も、支援も得られなくなるのではないのでしょうか？この市民の疑問に対して、公開の場で答えを避ける行動

によって、科学者としての倫理観をも持ち合わせていない人の集団であると市民にみなされはじめています。

この事態を憂慮した矢の会は、市民、及び研究者に広く声をかけ、賛同者を募り、ウイルス学の権威といわれる機関と研究者と指摘されているウイルスの存在、ウイルス分離同定の研究手法、ウイルスの病原性、ウイルス学自体の疑問について、市民代表と分野外の科学者との公開の場での討論を実施したく、提案させていただきます。

ウイルス学者、研究機関にとっては、これまで指摘されてきたウイルス分離同定とその手法、ウイルスの病原性、ウイルス学自体に関わる疑問に対して、公の場で、科学的に答える機会になると考えます。市民と他分野の科学者にとっては、ドイツ最高裁判所が否定したウイルス存在の科学的証明に関わる弁明を、科学者としての倫理観に基づき当事者の考えを聞くことができることです。疑義に対する考えを述べることで、科学者として批判的にウイルス学そのものを再構築することが可能になると考えます。このように双方にとってメリットが明確である公開討論の場は、ウイルス分離同定に関わる科学的手法、ウイルスの病原性確認、そして、ウイルス学、広くは感染症学の科学としての課題を相互に再確認し、理解を深めることができる機会であると考えます。

討論会の目的

1. ウイルスの存在証明について市民、他分野の科学者など広く一般に普及啓発する。
2. ウイルスの病原性について市民、他分野の科学者など広く一般に普及啓発する。
3. ウイルス学の科学的手法について市民、他分野の科学者など広く一般に普及啓発をする。
4. ウイルスの存在を科学的に証明する共同実験計画を策定し、その実行を合意する。
5. 新型コロナウイルス感染症とその蔓延防止対策によって深まったウイルス学研究機関、ウイルス学者と市民と他分野の科学者の間の不信感を解消するきっかけとする。

討論会の目標

1. ウイルスの存在証明とその手法に関わる疑問、問題について、ウイルス学研究者と市民、他分野科学者の間の理解が深まる。
2. ウイルスが持つとされる病原性とその科学的証明手法について、ウイルス学研究者と市民、他分野科学者の間の理解が深まる。
3. ウイルス学の科学手法に関わる疑問、問題についてウイルス学研究者と市民、他分野科学者の間の理解が深まる。
4. ウイルスの存在を科学的に証明する共同実験計画を策定し、実施する。
5. 新型コロナウイルス感染症とその蔓延防止対策によって深まったウイルス学研究者と自ら調査、研究した市民、他分野の科学者とこれからの未来に向けた対話を継続し、信頼関係を再構築していく。

討論の論点

1. ウイルスの分離と同定は科学的に証明されているのかどうか？
2. ウイルス培養方法はウイルスが増殖していることを証明しているのかどうか？
3. エンダースのウイルス存在確認（CPE）がウイルスによるものでない可能性が高いのではないか？
4. 全てのウイルス分離同定研究はエンダース論文準拠しており、科学的の黄金律である対照群がなかったのかどうか？
5. ウイルスの病原性について科学的に因果関係が証明されているのかどうか？
6. 上記疑問に答えるウイルスの存在、病原性を科学的に証明する実験をどのように実施すれば良いか？

開催方法

- ・ 新聞及びインターネットによって公開討論会の趣旨を公開する（2回）。
- ・ ウイルス学研究機関、研究者へ公開討論参加を呼びかける（本企画書送付）。
- ・ 賛同した個人、企業、機関から公開討論会に必要な寄付を募る。
- ・ 科学者としての倫理観を持って公開討論に参加してくれた研究者には矢の会が謝礼と交通費を用意する。
- ・ 討論会は、インターネット中継し、アーカイブは誰でも視聴可能な形でYouTubeだけでなく、他の動画投稿サイトにもアップロードする。

会場

- ・ インターネットが使用できる環境の200人規模で多くの人が参加できる会場（例：東京国際フォーラム）

参加者

- ・ 公開討論に賛同した市民、市民科学者、ウイルス学研究機関および感染症蔓延防止対策を強化した関係者など。

公開方法

- ・ YouTube、Rumble、他の動画投稿サイトにおけるライブ中継。
- ・ 録画をYouTubeだけでなく、Rumble、Bitcuteなど動画投稿サイトにアップロードし、市民がいつでも視聴できるようにする。

参考文献

1. マーク・ベイリー 著、ウイルス学への決別、drsambailey.com/a-farewell-to-virology-expert-edition/
2. トーマス・コーワン他、「『ウイルス論争を決着させる』 声明」、2022年7月14日：
<https://drsambailey.com/resources/settling-the-virus-debate/>
3. Christine Massey, "209 health/science institutions globally all failed to mention even one record of 'SARS-COV-2' purification, by anyone, anywhere, ever": <https://www.fluoridefreepeel.ca/68-health-science-institutions-globally-all-failed-to-cite-even-1-record-of-sars-cov-2-purification-by-anyone-anywhere-ever/> (accessed 11 Sep 2022.)
4. Stefan Lanka, "The Virus Misconception", WISSEnSCHAFFTPLUS magazin, 06/2015:
https://www.researchgate.net/publication/316280466_Virology_State_of_the_Art
<https://unidirectory.auckland.ac.nz/profile/s-wiles>

開催費用

1. 矢の会は討論参加したウイルス学研究者への謝礼と交通費を負担する。
2. 開催費用はウイルスの存在証明、科学としてのウイルス学に疑問を抱く市民に広く呼びかけ、募る。
3. 最大費用を負担する矢の会が録画映像の著作権を保有するが、インターネットに公開した映像に関しての利用はクリエイティブコモンとして日本国に税金を払っている個人は全て利用できることとする。
4. お互いに1回目の討論の事実確認のため、日を置いて2時間×2回の開催とする。

交通費と謝礼

詳細	日数	単価	金額
ウイルス学研究者 河本 宏 先生	2	¥550,000	¥1,100,000
ウイルス学研究者 宮沢孝幸 先生	2	¥550,000	¥1,100,000
			¥2,200,000

※その他経費は、矢の会 並盛研究室が全て負担